

木の目草の芽

2016年3月23日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-4433

年間購読料 1,000 円
申込: 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号00180-4-710688
加入者名: 川口章子

第121号

(目次)

- P.1 登山人生と自然保護
尾野 益大
- P.4 人間とはなんという・・・
伊藤 秀輔
- P.5 樹木観察会報告
渡邊 嘉也
- P.6 ニホンジカ被害状況と
埼玉支部自然保護活動から
川口 章子
- P.8 提案Ⅰ・Ⅱ
- P.9 「安曇野のナチュラルリスト
田淵行男」を読む
元川 里美
- P.10 活動記録

登山人生と自然保護

日本山岳会四国支部長 尾野 益大

自然保護について、大した考えや徹底した貢献活動はしていないから偉ぶることはできない。ただ、高校時代から登山を休みなく継続して、山から感じるものが常にあるし、人に少々意見を言ったり自ら汗を流したりしたことがあって「何か発表できる内容はないか」と思いを巡らせながら恥をしのび、大切な誌面をお借りさせていただく。

「自然保護」「環境保護」「自然との共生」などよく似た言葉がたくさんあるが、僕は国語学者、言語学者、法律学者ではないから、漢字や表現の意味、言葉尻にあまり執着していない。

では、どんな風に捉えているか。強いて言えば「人工の物でなく、人間生活にあまり危

険を及ぼさず、どちらかと言えば心身に優しく、何となくホッとでき、山仲間にも自信を持って薦めたい自然をいたわる」という程度の認識だ。残る登山人生も、そんな自然を見極めながら接し続けたい。

落葉広葉樹のブナの林と、さまざまな巨樹を巡る山旅に夢中になった時期がある。今も登山の際、意識している。ブナ林について、全国に存在するまとまった林を調査して約500カ所に分け入り、山行記やDVDにまとめ公にしている人との出会いがあった。山頂に目的を定めず山の中腹に森の宝があり、人が憩える場があることを教えてくれたといっている。いかに観察することを忘れ、宝物を見過ごして登っていたか。「木を見て森を見

ず」と痛感させられた。登山道を外れるシーンも当然増えるから、道迷いや転落を防ぐため読図やロープワークといった登山のイロハも身に付けておく必要があった。

巨樹に魅了されたのは都内の大学を卒業後、徳島に帰郷して新聞社でサラリーマン生活を送り始めた20代前半。四国の権田山に立つブナを偶然見たのがきっかけだ。スズタケの藪を抜けた空間でばったり出会い「えらく大きいのではないか」と発見した気持ちになっ写真撮った。その後、地元の専門家によって徳島一幹周りが大きいブナと判明し、我ながら心底嬉しくなった。今ではブナに限らず、桜、杉、桧、榎、樅、榎、五葉躑躅など樹種を問わず四国の山の主な巨樹の住処を心得ている。

四国で風前の灯火となっているツキノワグ



写真：幹周りが6.7mある大ブナ
西日本一の最高峰石鎚山の面河尾根にある
四国一太い大ブナと尾野

マについては手に入る限り資料を集め、目撃情報があれば現地に赴いた。クマ好きが高じて剣山周辺で捕獲されたツキノワグマの剥製を手に入れ、自宅に保管しているほどだ。イヌワシ、ニホンカワウソ、ニホンオオカミの関連資料を集めた時期もあるが、それらの生存は四国ではほぼ絶望、もはや幻だ。ほかに希少植物のパラダイスにも興味があり、ここで思いを紹介するときりががない。

それらのおかげか、山ではいつも思うことがある。バランス良く形成された森は、まるで慈母のように命を生み育てる。風格を漂わせた巨樹や、希少動植物が息づく環境がつけられるためには「数百年間の時間が掛かるだろう」と。1人の人間が一世代を生きる時間を30年間と計算すると、軽く5代や10代を要するということだ。だから自然界のサイクルを越すスピードで、一度壊れてバランスを崩してしまった自然は、数百年かそれ以上復元しないかもしれない。

自分一代で自然の何をどうする、ということとは現実には困難だ。忍び寄る悪化はなかなか目に見えず、気付いたときには既に遅すぎることが多い。そもそも人間一代、組織一代でできる行いなど些細だ。問題提起ができればそれでよし、と考えるのが精一杯。できるだけ後世にリレーすることが肝要なのだろう。あるいは、自然にダメージを与える寸前で食い止める方法があれば実るのかもしれない。しかし、主張するのは簡単だがハードルは

多い。人間の価値観は多様で日本規模、地球規模、宇宙規模で考えると、山の自然に無関心な人々の心には「小さなことだ」と映るのも現実。そうした人たちが多数を占める場合が多いのではないか。経済優先、科学技術を重視する考えも尊重しなければ、世の中、円

満に行かない。「開発か保護か」は永遠のテーマで、自然への干渉に対して下す評価は、本来は容易に天秤に掛けて決められない。評価して下した結果は、いずれ後世の人間の暮らしや人体に悪影響が現れて、それで初めて思い知り、決着が付くからだ。未知が多い自然に対する在り方は本来、深い見識の下で決められるべきで、素人が多数決で決めるべきではないのだろう。

四国を中心に登山を続けて30年余りがたち、山の景観で大きく変わった姿がササ類の藪の減少だ。一説にシカの食害、酸性雨、大陸から飛来する汚染物質、オーバーユースによる踏み荒らしが原因などと考えられるが、実際には複合的に絡み合っているように因果関係は突き止められていないと思う。なかなか解決しない問題だ。

僕は藪山を苦勞して歩き、くぐり抜けた後の達成感がたまらないと感じる性格だから山に藪が残っていてもいいが、藪が嫌いで快適な気分で行きたい圧倒的多数の登山愛好家にとっては、ある意味でシカや酸性雨、汚染物質に感謝しなければならぬという、おかしな話になってしまう。

手付かずの綺麗な沢を遡行するときなど、

瀧と水流、岩とコケ、それらが鬱蒼と茂る森の中で全てが絶妙のバランスで配置されていると感じ「永遠にこのまま残ってほしい風景だ」と願うことが多い。

しかし、自然と接し、見つめ、人間生活と折り合いを付けるのはやはり難しいと思う。僕は大学4年間、南アルプスの甲斐駒ヶ岳にある仙水小屋、七丈小屋、早川尾根の小屋で四季を通じ小屋番のアルバイトをしていた。また、故郷徳島の最高峰剣山の頂上に立つ剣山頂上ヒュッテが開設50年を迎えた際、歴史を振り返った記念本を刊行するというのでお手伝いもした。

そうした経験から、山小屋と自然との関係についてもいろいろ学ばざるを得なかった。山小屋は結局、旅館的役割だけではなく、長い登山史上、登山者に憩いの場を提供し、時に登山家や生物学者を現地へ道案内し、登山道を整備し、動植物を守る役目も繰り返し果たした。遭難者を救助する献身的な活動も数え切れないと知った。

ただ、全国の山小屋や避難小屋に考えを巡らせるうち、地中や沢筋にごみが捨てられている現実がある。最近ではトイレ汚染なども起こっていて、考えさせられるテーマが実に

多くなった。幼い4、5歳のころ、我慢できずに堤防や広場で小便をしたことがある。そのたび僕が祖母から言われた言葉がある。「『ミニズさん、ごめんよ』と謝ってからしなさい」と。山で用を足すことは頻繁にあるが、そのたび40年以上前に論された祖母の言葉を思い出せば、みんなに冗談半分に言っている。自然に余計な負荷を掛けることを心得ていながら、やむにやまれぬ人間の行いとは何と矛盾しているのかと悲しくなる。

アプローチに使う林道の利用の是非もロープウエー問題も、木道問題の功罪を問う意見にも耳を傾けなければならぬ。文明の歴史が刻まれる時間だけ解決しなければならぬ宿題が増えていく。

「何をすればよいか」「今、何ができるのか」。縄文杉を生んだ屋久島や白神山地が世界遺産に登録されたとき、早い時期に訪ねた。いわゆる名峰とは無縁のまま、原始に近い自然を色濃く長く残していると実感させられた。今では、さまざまな問題が発生している現実はあるにせよ「エリアを限定して人間が手を入れない」と決めた森との約束、保護を決定した発想は一番の方法と思えた。

日本山岳会には自然保護論を展開した先駆

者がいる。創立者で初代会長の小島鳥水だ。戦前からヨセミテを訪ね、上高地、八ツ岳、富士山などの保護論を主張した。中部山岳の国立公園指定の必要性を訴えた。鳥水は山岳会の組織作り、登山の実践、紀行文の執筆、自然保護の論陣を張るなど山にまつわることを何でもやったスーパーマンといえる。激しい肉体運動の後に必ず頭脳労働を怠らず、純粹に山と付き合える真面目な岳人だったと思う。

この人の仕事をもう一度読み返すと、問題がどういう顛末を辿ったか、成果が歴史的にどう影響を与えたかを知ることができ、自然保護の主張と活動が決して無駄ではないことを理解できる。「何をすればよいか」「今、何ができるのか」のヒントにつながる。

登山を通じて自然にまつわる出来事を思い浮かべると「人間が自然を守る」というのは実はおこがましい話で、「人間こそ自然から守られている」という認識が正確だと思えてくる。恵まれた文明生活を素直に送り、謙虚に山に入りたい。その上で余裕があれば、眼前の自然とは何か、今何をどうすればいいのか、現実社会とどう折り合いを付けるのか、気負わず向き合いたい。

人間とは何という・・・

伊藤 秀輔

私は中学時代より夏目漱石の作品を読み続けている。そして毎月読書会を主宰しており最近再度「吾輩は猫である」をみんなで読んだ。漱石の作品は読む度に新しい発見をするが、今回もある発見があった。西洋文明と東洋文明を比較するところで漱石は次のように書いている。

「西洋の文明は積極的、進取的かもしれないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と大いに違う所は、根本的に周囲の環境は動かすべからざるものという一大仮定の下に発達しているのだ。……自然その物を観るのもその通り。山があつて隣国へ行かなくては、山を崩すという考えを起す代りに隣国へ行かんでも困らないという工夫をする。山を越さなくとも満足だという心持ちを養成するのだ」

これを読んで最近話題になっているリニアモーター(リニア中央新幹線)を思い出した。東京から名古屋迄ほとんどトンネルの中を時速五百キロ位で人を運ぶ計画らしい。私が所属している日本山岳会の静岡支部会員が、こ

の計画についてユネスコのエコパークに登録された南アルプスの自然環境を壊さないで欲しいとして、他の山岳連盟と一緒に要望書を静岡県知事に昨年の秋に提出したという記事が会報にあった。

この記事によるとリニアモーターはJR東海が計画しており、東京の品川駅から名古屋駅迄の延長二百八十六キロの内、静岡県内は全てトンネルである。つまり静岡県を挟んで山梨県、長野県の間にある南アルプスは地下で通過せざるを得ない訳で、このトンネル工事は巨大なものになる。

この南アルプスのトンネル工事により膨大な残土が生まれるがこれを投棄するとすれば自然破壊に繋がる、又工事によりアルプスの地下水脈を切断する事になり、自然の水脈を壊し、周りの地域において相当の減水になるという。

又このリニアモーターは車体を浮かせて走るため、膨大な電力を消費する。このためこの計画自体は人間が作り出した不条理の一つであると思われる原発を稼働する事が条件になつていゝらしい。

我々は何か一つ便利なものを発明すると何かを失つて行つていゝ様に感じるが、ここで

もう少しこの計画について立ち止まり、議論して見たらどうかと思う。

世間では新しい技術だとして大騒ぎしているが、もし漱石がこの計画と世間の騒ぎを見るとすれば、どの様に語るであろうか。

(「広島ペンクラブ会誌2016(上)掲載」)
(日本山岳会広島支部会員)

■自然観察会報告

明治神宮樹木観察会

(平成28年1月実施)

自然保護委員会主催の第1回自然観察会、基礎講座「樹木識別のヒント」を1月24日東京代々木の明治神宮の森で実施しました。

観測史上、初めて沖縄に雪が降り、雪が残る神宮の森で常緑樹を中心に観察会を行った。参加者は埼玉・千葉・多摩支部会員15名と自然保護委員7名の22名が参加した。講師は森林インストラクターの山田和人氏(JAC副会長)にして頂いた。

神宮の森は、「1920年、荒地のような代々木の大地に明治天皇と昭憲皇太后を偲ぶ地として、神を祭るにふさわしい森を現出させようとドイツで林学を学んだ本田静六、本



(撮影：廣田 博)

郷高德、上原敬二の3人がこの地での最も安定した『極相林』として、自然に世代交代を繰り返して人の手を借りずに永遠に生き続ける森の姿を目指して取り組んだ。森の姿に」と全国から10万本もの献木の申し出が届いた。」

(National Geographic 2016年1月号) 「造営当時365種であったが東京にそぐわない種類もあり現在は234種と報告されている。」明治神宮ウェブサイトをより抜粋。日本人が作った自然の森である。

観察に先立ち、大分類としての裸子・被子植物、葉の形、葉序(枝につくパターン)・葉脈・裂け方など樹木識別の基礎および陽樹と陰樹の関わりについて、森の「クスノキ(楠)」、ヒサカキ(桧)、アオキ(青木)、シロダモ(漢字名なし)、ネズミモチ(鼠竊)を教材に観察し、シートに記録した。

教材の知識を基に、100年を経た森に生育する「シラカシ(白樺)、アラカシ(粗樺)、ヒノキ(檜)、モッコク(木斛)、マテバシイ(馬刀葉椎)、スダジイ(漢字名なし)、センリョウ(千両)、マンリョウ(万両)、モミ(樅)、ヤツデ(八手)等の特長を学んだ。ウバメカシ(姥目樺)、シユロ(棕櫚)、マユミ(真弓)、スギ(杉)、ケヤキ(欒)、ホンサカキ(本榊)、カラスザンショウ(烏山椒)などの観察もした。

今回の観察会では樹木識別の基礎を学びました。季節を変えて次回観察会を行います。

(自然保護委員 渡邊 嘉也)

<樹木観察シート>

和名	科名	広/針	常/落	単/複	葉序			葉縁			葉脈			特徴		
					対生	互生	輪生	束生	全縁	波状縁	鋸歯縁	重鋸歯	羽状脈	掌状脈	平行脈	
クスノキ	クスノキ科	●	●	●	●	●			●				●			葉の表面がツヤツヤ 葉をちぎると芳香 樹皮は縦に深く裂ける
楠		●	●	●	●	●							●			
		●	●	●	●	●	●							●		
ヒサカキ	サカキ科	●	●	●	●	●							●			葉脈は大きな網目状 葉柄に蓋がたくさん
桧		●	●	●	●	●							●			
		●	●	●	●	●	●							●		
アオキ	アオキ科	●	●	●	●	●							●			大型の葉 鋸歯は粗い 赤い実
青木		●	●	●	●	●							●			
		●	●	●	●	●	●							●		
シロダモ	クスノキ科	●	●	●	●	●			●				●			葉は細長い 葉の裏は白い 葉脈が基部から3つに分岐
白だも		●	●	●	●	●							●			
		●	●	●	●	●	●							●		
ネズミモチ	ネズミモチ	●	●	●	●	●			●				●			黒い小さな実が房状
鼠竊		●	●	●	●	●							●			
		●	●	●	●	●	●							●		

ニホンジカ被害状況と

埼玉支部自然保護活動から

平成28年1月21日(木)埼玉支部自然保護委員会主催の第5回シンポジウム『埼玉の自然を知ろう』が浦和で開催され参加者は埼玉支部会員、会員外の参加もあった。

シンポジウムのテーマは ①森づくり

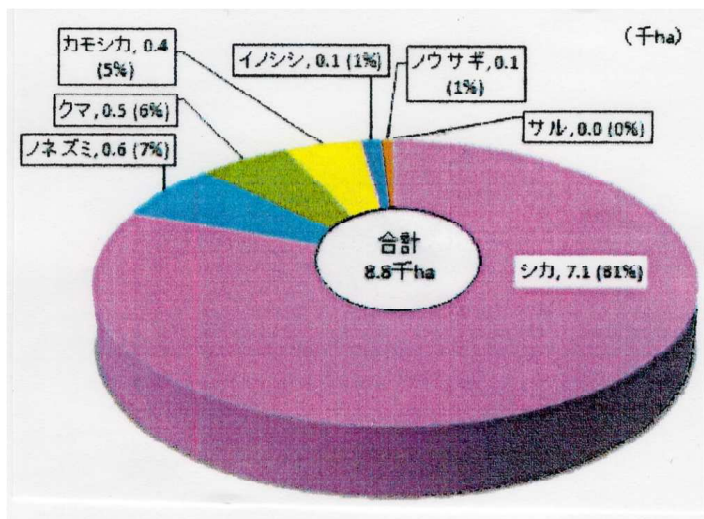
②シカ食害調査 ③大高取山自然観察会で平成26年度の活動報告が各担当者からあり、質疑応答、活発な意見交換がされた。

特に②シカの食害については、会員、一般参加者もパワーポイントで紹介された『埼玉県全山シカ分布図』には驚きの声が上がった。

自然保護委員会活動として平成10年から始められたこの綿密な調査報告を聞き、日常山登りをしているが「こんなにひどい状況とは」との発言がきっかけとなり参加者全員に司会者が、意見を求められた。

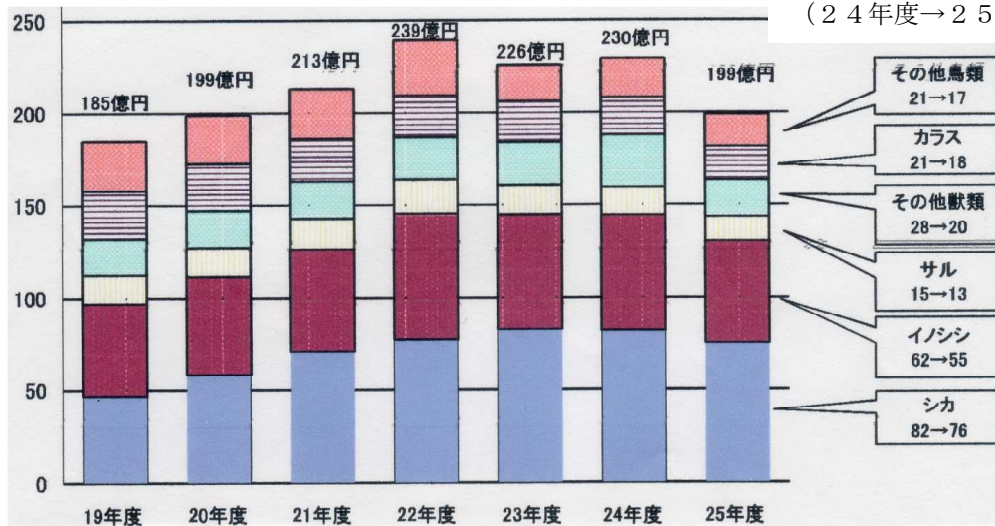
当然のことだが、シカの駆除に賛否両論出たが殆どの人は駆除をせざるを得ない状況を理解し、現状の数は、捕獲数を越え増殖していることも報告され、これからの課題となった。

シカは県境や行政区域とは関係なく集団で餌を求めてすばやく移動し、その被害は関東山地全域に急速に広まりつつある。今後、近隣のJAC支部自然保護委員会の方々の協力を得ながら、調査活動を進めていくことが大切ではないかと今後の活動方針が提案された。



※林野庁資料
 主要な野生鳥獣による森林被害面積(平成26年度)は、全国で9千ヘクタール。シカによる被害は全体の約8割を占めていて、深刻な状況にある。

(24年度→25年度)



※農林水産省資料
 野生鳥獣による農作物被害金額の推移 (都道府県からの報告)

提案 I

1月27日(水) 自然保護協力委員の大森弘一郎氏に「シカと自然保護」の講演をして頂いた。自然保護の萌芽から、山の自然学講座の活動、自然保護専門委員会の設置など、現在の自然保護委員会の活動へと繋がる経緯を話された。そして提案された、今できること、として、自分は、今もライチョウ保護活動などをしていけるけれど、シカ問題には鉄砲を考えずに、シカ牧場を作つて管理をすると同時に肉の販売ルートも作るのを考えてみたらと提案をされた。人は生き物を食べて生かされているのだから、多すぎると、100万頭を食べることが問題の解決になるのでは。と。

その後シカ肉のローストや、ソーセジなどを購入し食



べて見たがソーセジは高くてもおいしくなかった、けれど、おいしい料理にすればいい。これは、台所で、今すぐできる、自然保護活動になるのではと言っておられる。

提案II 素朴な提案

1月21日(木)に日本山岳会埼玉支部自然保護委員会が主催した浦和のシンポジウムに出席された会員召田俊雄氏からの提案です。

『シカ食害調査』と題した吉田寛治氏の報告を聞いていて、山岳会の各支部がそれぞれシカの食害エリアを山単位でチェックしてキャンペンしたら、世論や行政にデータにもとづく資料として関心をもつていただく、まさに山岳会らしい活動ではないかと、考えた次第です。

シンポジウムでは難しい意見も出ましたが、理論は専門家の力を借りるとして、山岳会らしい実地に根ざした地道な活動をひとつひとつ積みあげていくことが、シカ問題では重要なのではないかと考えました。

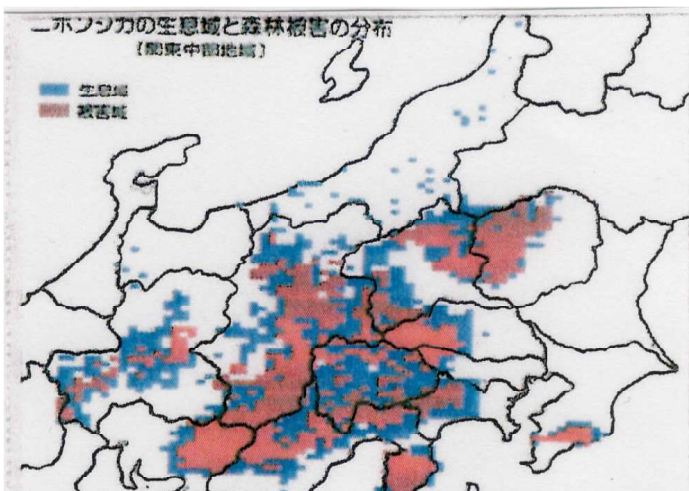
日本山岳会が『分水嶺調査』で各支部単位で足で確認した生々しい事例が最近もあ

りました。

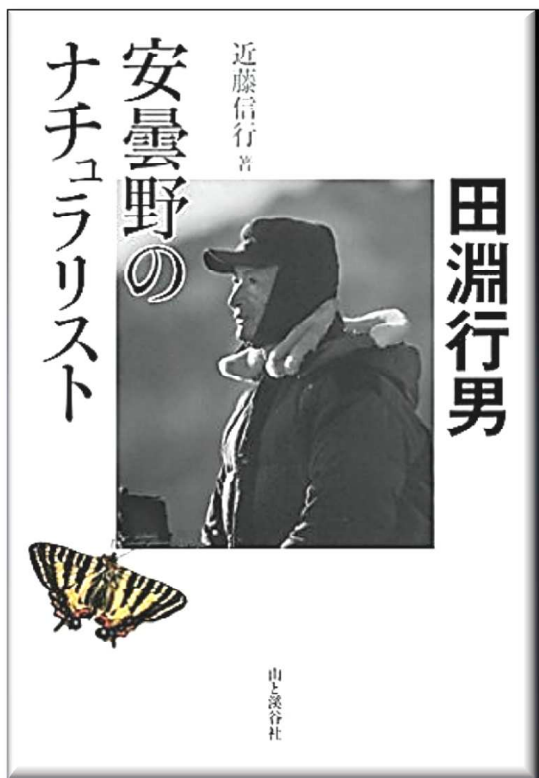
自然保護委員会が各支部の自然保護委員会に呼びかけて、先ず小さな輪を回していくと、やがて日本山岳会の声に結び付くのではないかと、とも考えました。

ちいさなところからスタートする、これはどうでしょう？

(文責：川口 章子)



田淵行男



近藤信行著

「安曇野のナチュラリスト 田淵行男」を読む

田淵行男と自然保護

今はもう建て替えられてしまったが、昭和45年に建てられた上高地自然教室（旧上高地ビジターセンター）の展示室壁面は田淵行男氏の作品で構成されていた。山岳風景をはじめ、高山植物や雷鳥の写真、高山蝶（成虫・幼虫・食草）の細密画、そしてそれらの解説と、一編の美しい詩「雲」。

「まだ情報も予算も少なかった時代、当時の国立公園レンジャーが安曇野の田淵氏を訪ねて

協力を依頼し、快諾した氏が60点を超える写真と高山蝶の原画を無償で提供、解説文を加えて壁面に配列し完成させた」そうだ。「上高地VCガイドブック」より

昭和45年といえば田淵氏が山の三部作を手掛けていた頃だろう。私の手元にあるのはそのうちの「新編 山の季節」だけなのだが、それを読むと当時の田淵氏の思想とメッセージがそのままセンターの展示に体现されていたことに、今更ながら気付く。あの展示は、紙という限られた平面から飛び出した、田淵氏渾身の、いわばイン

スタレーション作品ではなかったか。閑話休題。その慎ましき知の巨人について私は決して多くを知らなかった。残された言葉と作品、そして肖像の凛とした佇まいから、博物学者としてのゆるぎない姿と、誠実で純粋な人間性を垣間見つつ、その人柄に思いを馳せるばかりであったので、この本を手にした時には心が躍った。いったい田淵氏はどのような人物であったのだろうか。私は嬉々として田淵氏の人生を辿った。

そこでは私の知りたかったこと、これまで想像する以外になかったことが明らかにされ、ぼんやりとしていた輪郭が次第にはっきりとした確信へと変化した。その心地よい感覚に酔いながら一気に読んだ。

読後感をどう説明したらよいだろう。一点の曇りなき眼差しで自然の命を見つめ続ける田淵氏。そしてその本質をひもときながら、ひとりの人間の人生に寄り添う著者の姿があった。どちらもひとつの真理をみちびきたすために、いくつもの確認作業と思索を重ねたに違いない。時に自分自身をどこかに置き去りにして、なおひたすら対象を追いつける、そんな両者に通ずる深い愛に、何よりも素直に感動した。

田淵氏は優れた山岳写真家として広く知られてきたようだが、やはりそれ以上に透徹した博物学者であり、自然愛護者であった。身近な自然を心から愛し、高山蝶や蜂の知られざる生態を根気強く探り続ける一方で、人間の身勝手な行為に幾度となく戸惑いをおぼえている。そうして、自らの感性と言葉を媒体にして、自然の声を社会へ次々と発信していった。高度経済成長に人々が陶醉する時代に、いち早くインテリジェントなところをみているのだ。

（自然保護委員 元川 里美）

◇自然保護委員会の活動記録◇

〈一月度〉

①理事会報告 1月12日(火)

- ・ 準会員制度導入を検討
 - ・ 永年会員に、『山』『山岳』等の実費相当の費用を負担いただくことを検討
 - ・ 長野県登山安全条例の施行：今後特定の登山道に入る人は、必ず登山届けを。
- #### ②山岳団体自然環境連絡会報告…1月22日(金) 出席者：川口。

・ シカ問題に関する7団体合同シンポジウムを開催する方向で検討を始めた。

③自然保護委員会 1月27日(水)

委員会審議に先立ち自然保護委員会協力委員の大森弘一郎氏のテーマ「シカと自然保護」のミニトークを開催。

・ 2016年度 自然保護委員会事業計画・予算案を提出。

・ 従来の事業計画を踏襲しつつ、自然観察会などを増やす。

・ 自然保護全国集会(四国)について

・ 4月17日(日)に現地視察を行う。

・ 『木の目草の芽』について

・ 第120号を1月27日に発行。

・ 第121号の編集会議を行った。

・ 自然観察会・シンポジウム等について

・ 「2016年第1回自然観察基礎講座―樹木識別のヒント―」を1月24日

(日)に明治神宮および代々木公園にて開催した。参加者22名。

・ 「埼玉支部自然保護委員会シンポジウム」1月21日(木)に川口委員長が参加した。

・ 「山の日」施行記念事業開催を検討。

〈二月度〉

④理事会報告 2月10日(水)

神奈川支部の設立承認(設立総会は3月19日。支部員数129名)

・ マナスル初登頂60周年および国民の祝日

⑤自然保護委員会 2月24日(水)

・ 自然保護全国集会(四国)について

・ 2月24日(水)実行委員会を開催、予算ならびにプログラムの検討を行った。

・ 自然観察会・シンポジウム等参加報告

・ 山梨県森林総合研究所主催、『南アルプス高山帯のニホンジカをどう管理

するか』、2月11日(木)、山梨県立大学・飯田キャンパス講堂に、川口委

員長、富澤委員、西谷委員が参加した。

・ 環境省箱根自然環境事務所主催、『箱根、丹沢、富士山、伊豆半島における

ニホンジカ対策の現状』、2月13日(土)、神奈川県立生命の星・地球博

物館・SEISAミュージアムシアターに、

川口委員長、富澤委員が参加した。

・ HATJ主催、『ライチョウから知る

日本の山岳環境』、2月13日、国立オ

リンピック記念青少年総合センター

に、廣田委員が参加した。

・ 活動計画について

・ 自然観察会、シカ問題現地視察、ライ

チョウ保護活動に関する計画を検討した。

〈編集後記〉

今年の全国集会開催地、四国支

部の尾野支部長に巻頭をお願いしました。昨年の全国集会でパネラーをつとめてくださった折のお話も印象深いものでしたが、長年の

登山経験と熟考に裏打ちされた哲学を軸に持

つしなやかに、学ぶべきものは大きいと感じました。自然保護活動の半分は、自然保護

について沈黙考することかもしれません。

皆様のお考えをぜひお寄せください。 元川